

## 燕のものづくり発展の歴史と ジャパン・ツバメ・インダストリアルデザインコンクール

新潟県燕市物産見本市協会事務局・燕市役所 産業振興部 商工振興課 ブランド推進係

### ◇ 自然と産業・歴史が調和するまち 燕市

新潟県燕市は、越後平野のほぼ中央、県都新潟市と長岡市の間に位置する、人口約8万人の街です。面積は約110平方キロメートル、山手線の内側の面積の約2倍で、そのうち約半分が田畑となっています。日本さくら名所100選の地「大河津分水路」で行われる絢爛豪華な「分水おいらん道中」や名僧・良寛ゆかりの地「国上山」、そして信濃川水系の豊かな水を併せもつとともに、県下有数の工業地帯としても有名で、スプーン・フォーク・ナイフなどの金属洋食器や、厨房用品などの金属ハウスウェアの国内主要産地となっています。こうした金属製の日用品を返礼品として数多く取り扱う燕市のふるさと納税は、2015年から四年連続で新潟県内第1位の寄附金額を誇っています。

ちなみにグッドデザイン賞のロゴマークを手掛けた、世界的に有名なグラフィックデザイナー 亀倉雄策氏も燕市の出身であり、名誉市民の称号が贈られています。

### ◇ 燕のものづくり発展の歴史

燕市の金属産業のルーツは江戸時代初期、度重なる洪水によって困窮した農民を救済するための副業として始まった和釘作りです。後に「釘鍛冶千人」と言われるほどの一大産地となりました。江戸時代中期頃からは、ヤスリ、キセル、鎚起銅器<sup>ついき</sup>など、次々に新たな特産品が生まれましたが、文明開化とともに衰退していきます。1911年、それまで培ってきた技術が認められ、金属洋食器の加工依頼が東京から舞い込みます。大正時代には、金属洋食器の生産が本格化。早くから機械での生産が地元でできたこ

### ● 燕を代表する金属産業



江戸時代に製造された和釘



金属洋食器製造は現在も国内トップ

とも強みとなりました。機械はまずプレス機の導入から始まり、その後電気が届き、多くの工場が動力機械を導入し、本格的な量産ができるようになりました。昭和初期までは順調だった燕市の金属産業界ですが、日中戦争以降は輸出が減り、軍需品生産へ転換していきました。戦争が終わると、進駐してきた米軍による特需として、金属洋食器製造は復活を遂げ、欧米で主流となっていたステンレス製へ転換していきます。

1953年には、炉を導入する会社が出始め、溶解から圧延まで一貫生産ができるようになり、ステンレス製品の製造が本格化しました。やがて、欧米は